ヒューマニズムの再生と文化の伝承

――教育が見据えるもの――

岩田宗一

本稿は、宗教と教育に関する今日的課題を抄出し、そこに内包する問題点を、主として筆者のこれまでの教育経験に照らして論述したものである。

宗教と習俗

真宗門徒の家庭を除くとしても、日本に於ける多くの家庭には仏壇とともに神道の祭壇があり、年末にはイエス・キリストの誕生を祝ってクリスマスを行ない、年頭には神社に初詣し、法事は仏教寺院または家庭の中の仏壇前で行なう。若者の間では、キリスト教信者でないにもかかわらず、キリスト教会で結婚式を行なうことに人気があり、十字架を装身具として身に着ける。建造物の新・改築や土地の造成には神道の神官を招いて祓いを行ない、神社への参詣者の多くは本殿に参拝もそこそこに神籤に熱中し、護符を受ける。

このような状況は、まさに出雲の阿国の異形な装束による「傾き（かたぶき→かぶき）踊り」に都市市民が熱狂した桃山期を髣髴とさせる社会現象であるということができる。阿国は神職たる巫女の装束の上に仏門者の僧衣をまとい、首に十字架を懸け、数珠を手にして口には「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏」と唱えて踊ったという。このような傾き現象を、全ての旧秩序や慣習から抜け出ようとする当時の市民の、爆発的な活力の

表出とするべきか、あるいは自由で闊達な時代にして初めて可能となった健康な現象と見るべきであろうか。

日本人の大部分の底流にあると思われるこのような性向は、日本人一般が信仰に不定見なのではなく、森羅万象全てに神性を見、その全てを畏敬の念を以て礼拝するという、ほとんど全ての民族が古代に持った自然観・世界観を、今日においても本質的に持ち続けているのではないかと考えるものである。またその一方、中世の念仏芸能の広がりに見られるように、本来、信仰とその儀式と不可分の関係で成立した称名行が一旦民衆の手にわたるや、すさまじいエネルギーでもって無数のヴァリエイションを展開させ、そのうちの多くを念仏芸能として習俗化させてきた歴史を持っている。

このことは、近年、キリスト教との関係についても言うことができる。例えば、イエス・キリストの誕生を祝うクリスマス行事をしている仏教系幼稚園・保育園のあることが知られている。この場合クリスマスは日本においてはすでに習俗となっていると説明される。また、本学科の学生によって付属幼稚園の園児を迎えて行なわれる一年一度の祭典に、イエス・キリストやマリアを讃える歌を含んでいる音楽劇を上演することの是非に関する意見を求めてきた学生が、そのような演目を選んだ理由に「子どもが喜ぶから」「上演予定日がクリスマスに近いから」を揚げた。

クリスマスを子どもが「喜ぶ」理由の一つは、贈り物が子どもの好奇心や所有欲をそそるからである。しかしキリスト教国から見ても異常なまでに加熱したクリスマスの日本的展開は、商業的に企図され演出された結果であって、成人社会が用意した以外の何ものでもない。真のキリスト教徒ならば、クリスマス当日、静かに教会に赴き、ミサで祈ることであろう。もしも子どもが喜ぶことが保育の基本だとするならば、戦時中およびそれ以前は、玩具とはいえ鉄砲や刀を振り回しての戦争ごっこに男の子供たちは夢中であった。これこそ意図的に高揚された施策の一環であったことは、その結果を以てわれわれに教えているとおりである。

ここで言うところの習俗とは、民族、地域の文化の紛れもない重要な構成要素の一つとしてのそれである。宗教を習俗と同列に扱うことには大きな抵抗があるに違いないが、民族や地域の人々の思想や思考方法を決定づけるものが哲学

や宗教であるとするならば、習俗はその基層に現れた最も顕著な徴証と言わなければならない。そして、その多くは民族や地域の人々の行動様式を規定づけていると思われる。それならば、宗教教育・宗教保育の目標を、宗教・習俗を含む文化の伝承の問題として位置付けてはいかがなものであろうか。しかし、習俗には古代的な自然信仰や祈禱をはじめ、意図的に演出されて、あたかも定着しているかのように錯覚させられているもの、そしてときには迷信に属するものが多い。真の宗教教育・真宗教育はこれらの中から真なるものを見分ける力をつけることにその重要な目的の一つが置かれなくてはならないのではないだろうか。

文化と伝承

ところで、文化の伝承と言えば、過去の遺産を次代に単に伝えるという非創造的な役割とのみに理解される場合がある。しかしそれは伝承の意味を極めて限定的に規定した結果と言わなければならない。思想・宗教・科学・言語・文字・生活慣習（衣食住）・社会構造・立ち居振る舞い（行動様式）、これら全ては文化の範疇に属する。言い換えれば、文化の伝承とは、自らが自らの属する文化圏の一員となるための必須要件である。仮にこれらの伝承を行なわなかったとするならば、人としての存在を否定するに等しい。さらに、「単に伝える」と言ったとき、すでに伝えるべきことがらに価値を認めていないという意味がそこに込められている。と同時に、伝えることの努力を放棄することが、あたかも創造への道であるかのような重大な誤解をも伴っていると言わなければならない。

また、伝承は絶えず創造と一体の関係にあるとし、伝承のみにこだわっておれば、伝承しようとするそのもの自体が博物館入りになってしまうとの主張があるが、そこには先ず第一に、博物館の果たす役割と意義についての大いなる誤解がその根底にあることも見過ごすわけには行かない。それにもまして、創造とは一体如何なることを意味するのかという命題が正しく認識されていないように思われる。伝承を抜きにし、無視し、飛び越えて創造があると考えるとする

ならば、それは全くの思いつきか、自信過剰の結果であると言わなければならない。そしてその思いつきさえもが、伝承の範疇から決してはみ出すことはない。先の「傾き踊り」（歌舞伎）の例に見られるような、一見、伝統への反逆であるかのようでさえある異形の装束と踊りぶりも、それ以後の歌舞伎の歩みが示しているように、歴史的に形成せられた宗教や芸能をはじめとする諸々の伝統や風俗から、可能な限りのものを貪欲なまでに取り込んだ姿であることを銘記しなければならない。

著名な画家（岡本太郎氏）が日本万国博覧会の中央広場に建立した太陽の塔の意匠について、氏自ら語った言葉に「あの塔の完成後、エジプトの砂漠から、全く同じ形をした遺物が発見された。俺の意匠を四千年前に盗んだけしからぬ奴がいたものだ」というのがある。

この事例は、現代の人間があたかも創造したと考えているそのほとんど全てが、古代においてすでに発想されていたことを物語っていると言って良いだろう。ただ、その実現のために今日までを要したというべきものや、未発見のものが大部分である。このことに関連して、各民族や地域文化圏が到達した最高の文化的高揚期の大部分が古代又は中世に起源を持つことは極めて重要である。たとえば、わが国の文化的基礎が成立したのはまさに平安時代であると言えよう。今日においてもなお日本人があこがれ、誇りとし、文化的営為の目標にさえなっている文化遺産の大部分はこの時代に集中している。この時期に日本人が固有の文字を持つに至ったことはその中でも極めて象徴的である。

文化がもっとも集約され、結晶化されたと考えられるものに、言葉と文字とその文化圏に属する人の行動様式がある。その中でも社会的存在としての人間にとって、人と人とが交わす挨拶行動は社会生活の基本であり出発点である。たとえば、日本においてはこの挨拶行動は、互いに低頭することにより行なわれるが、これと並んで合掌が行なわれる場合もある。この合掌は東南アジアでは一般的である。すなわち互いに合掌する。またヨーロッパ・アメリカでは握手が基本である。イスラム文化圏やスラブ民族では抱擁と接吻である。オセアニアの特定の地域では口から舌を長く出すこと

が行なわれている。

また見知らぬ者同志が道ですれ違うときなど、西アジアの一部では互いに視線をそらさないことが相互に敵意のないことの表明となるが、日本においてはそのような視線は敵意ないしは言いがかりを意味している。

このように同じ心情の表明にも様々な振る舞い方のあること、この「かたち」の相異こそ文化の相異そのものに基づいていることが分かるのである。すると仏前で手を合わせるという所作も、仏教の東漸とともにアジア全域に広がった作法であり、習俗であると言わなければならない。その以前を辿れば古代インドの習俗に行き着くであろう。もっとも、中国や朝鮮・韓国のそれぞれには固有の作法があったことは言うまでもないが、相手に対する敬意の表現作法として、とくに仏教徒の礼拝対象に対する最も基本的な作法として合掌が定着していることは周知の通りである。ちなみに、さらに深い敬意を表す作法として接足礼や投地礼がある。

このように、人の行動様式はその人が属する文化圏のさまざまな要因が、内的動機となって「かたち」として表出せられていることが分かる。そして、哲学を含む一切の人間の思考活動も、「かたち」を持った人間の活動である。そしてそのかたちは、ときには一定の形状をなし、ときには行動の規範や営為の目標として顕在化する。その際、「かたち」に縛られず、自由な発想でもって豊かな想像力を発揮する人間などあり得るであろうか。もしも自らをそのような存在であると考えている人間がいるとすれば、それは自らと人間とに対する途方もない誤解のしからしむるところである。「かたち」から離れて人間は存在することができるであろうか。

しかしこのような「かたち」の伝承は複写と同一ではない。帰属の問題である。第二次世界大戦後、日本人の民族としての帰属意識が希薄になったことが指摘されているが、その第一の原因は偏に文化の伝承が希薄になったことにある。このような状況は、社会のあらゆる局面で極めて危機的様相を現出している。すなわち、「かたち＝規範」を見失ったところに、一挙に社会や国家の構成員の精神と行動を一方的に動員するファシズムの危険が待ち受けている。人々がその

扇動に魅せられて、怒涛のごとく破滅に向かって突き進んだ記憶はまだ生きている。そして当然のことながら、その成功によって利益を得る特定の扇動者達がいるが、それに加担した多くの人々にも、それによってもたらされた結果に対する苛酷な代価を支払わされる運命が待っている。

「かたち」は内容の顕現である。それを人間とその社会について言うならば、一切の精神活動・言語・伝承・習慣・生活様式を含む「かたち」は文化そのものである。ただし、内容からかけ離れ、あるいは全く異なった「かたち」を外的な力で押しかぶせようとしても、必ず元の「かたち」に還ることは、歴史が教えている。

ヒューマニズムは死んだか

伝承すべき文化について語るとき、人間の存在がその大前提であることを顧みなければならない。もしもその人間が逼塞状態になっていたり、存在の意義を見失っているところには、もはや文化の伝承もその意義を失い、その文化は衰滅の道を辿るほかないであろう。この文化の担い手である人間の洞察は、ヒューマニズムを起点としていると考えるべきである。ここに至って人間解放と人間性の擁護をその底流としたヒューマニズムが今再び見直されるべき時に来ているのではないかと考えるものである。

ヒューマニズムは、神や外界をどのように捉えるかというところから出発して、自己を含む人間の洞察へと向かったギリシャの哲人たちや、それを受け継いで人間讃美を展開したローマ人たちに由来する。中世からルネサンス期においてはキリスト教的束縛や封建的抑圧からの人間解放思想の底流を形成し、やがて近代社会の人間性の擁護運動の指導原理へとその歩みを進めてきた。

しかし現代においてはその理念はいつの間にか人間中心主義・人間本意主義と置き換えられ、全く変質してしまったかに見え、ヒューマニズムは既に過去の遺物であると考えられているのではないかと危惧するものである。時には、環

境破壊やさまざまな社会問題でさえ、ヒューマニズムの行き着いた結末であるとする論調もある。

もしも仮にヒューマニズムが利潤追求のためには自然破壊や生態系の破壊をも顧みない一部の巨大資本に、人間が求めてやまない快適で豊かな生活を保証するために貢献しているといった何らかの理念的根拠を与えているとするならば、それはヒューマニズムを自己の利潤追求に奉仕させるために利用し、変質させ、挙げ句の果てにその結果に対する免罪符的口実に転用しようとしていると言わなければならない。

今、人類が抱えるあらゆる問題に立ち向かうためには、その根底に「再生されたヒューマニズム」がなければならない。「再生されたヒューマニズム」とは何か。「動物愛護」や「自然保護」というような偽善的スローガンをやめ、「人間愛護」「人間保護」を高らかに掲げるべきである。

人間にとって快適で、物心ともに豊かな生活と環境とが、人間の飽くことなく追求してやまない目標となってきたことは事実として認めなければならないが、しかしそのことは、人間をとりまく動植物を含む自然環境との調和がなくては成り立たないばかりか、それを無視するならば人間の生存自体がおぼつかないことは、すでに二十世紀後半の人類が実体験の内に学びとったことである。

従って、自らの快適さと豊かさが環境の破壊の上に成り立っていることに気付かず、または気付いていてもそのことを無視し続けているとするならば、それは一瞬の快楽に酔いしれて、破壊への道を突き進んでいることに他ならない。

ヒューマニズムを「人間を真に人間たらしめている本性を尊重し、擁護し、実現しようとする立場」とする宮島　肇氏の定義の真の意味を再確認するところから、ヒューマニズムの再生が可能となるのではなかろうか。

「生命を大切に」の問題点

「人間の生命」を大切にすることの意味をなぜはっきりさせないのか。「生命を大切に」は極めて曖昧である。地球上

に存在する全ての生物は、他の生命の犠牲の上でしか一瞬たりとも存在できないことは熟知されているところである。人類についてみるならば、その歴史の全過程で、自らの生命と存在を脅かす全ての微生物を含む動植物に対しては、容赦のない戦いを行なってきたし、その戦いは今も一瞬の休みもなく続けられている。

自然保護をいうとき、人間の生存と生活にとって必要な自然と環境を大切に、とはなぜ言わないのであろうか。幼児教育に永年携わってきた教育者が、園庭の手入れをしているときに、園児から「なぜ雑草を引き抜いているの？　可哀想に」と言われて言葉に詰まった、と本学の講演で語られたことがあった。答えを期待したがついになかった。雑草に他の草花と同じ命を見た園児の感受性は大切にしなければならないが、そこで滞まっていては真の命のありのままの姿から子どもを一時的に隠してしまうことになりはしないであろうか。

確かに人類は、全歴史を通してその生命の維持や生活にとって有用な動植物との共存を進め、時には彼らを慈しむことさえしてきた。それは彼らが人間の生活に役立ち、心をなごませる動物や植物である場合である。特に動物に関していうならば、彼らはときには人間の危機的状況に際して人間とともに、或いは人間に代わって立ち向かってくれる伴侶として処遇してきた。しかしその一方で、彼らのうちのあるものは食用に供し、彼らから衣服（皮毛）・生活用品を得、また医学上の実験用とするために彼らを飼育し、その生命を奪い続けてきたのである。

「感謝の心と命の大切さ」はこの事実を凝視したところから自覚されるのでなければ、真の自覚ではないのではないだろうか。人が人たる所以は、この厳然たる事実を凝視して、自らの生命を支えてくれている全ての生きとし生けるものへの限りない慈しみと感謝の心を持ち得るところにあるのではなかろうか。どこまでも「人間の生命の大切さ」が明確にされなければならない。そうでなければ、自宅で愛玩動物をそれこそ猫可愛がりしている人が、他人の命を平気で奪ったり傷つけることになろう。そこには何が最も大切なのかということが欠落しているのである。単に「命を大切に」では駄目なのである。「人間の」が、どうしてもなければならない。

しかしその人間の、全ての事象や事物に対する価値観や要求は、文化・宗教・生活習慣の相異や、時と場合によって見事に逆転する。例えば、カルガモの家族が東京の市街地の道路を横切るときには、その愛らしさに心惹かれて、人々は車の流れを止めて保護し見守るが、秋田の田圃を荒らすカルガモには銃を向けて数百羽を撃ち殺す。この二つの事例を同じ「動物愛護」で説明できるであろうか。また、この様な人間の対応を、人間の身勝手さの現れということができるであろうか。人類に共通することと言えば、人間にとって役に立ち、愛らしく心なごませてくれるものは愛護するが、危害や損害をもたらすものとは敢然と戦ってきたことであり、それが人間であることを明確にしなければならない。

そして自己も他人もともにそのような「人間」であると自覚することから、はじめて一人の人間の命を支えているのは、人間相互の絆であり、ともに地球上に生きる動植物たちであることに気付くのである。

再生されたヒューマニズムとは、このような自覚の上に立った人間の再発見を意味すると考えるものである。

「自然を大切に」の問題点

人類が科学や技術の発展によって、自らの生命を守ることやその生活上で如何に多くの恩恵を受けてきたことか、また受けつつあるかは、誰しも否定できないであろう。もっともその成果の全てが肯定的なものであったのではないことも誰しも知っている。とは言え、これらの否定的側面を強調する余り、科学や技術の発展の成果を罪悪視するところからは、現代と未来に何物も生み出すことはできないことは明らかである。

しかし、地球上に生息する一つの種としての人間の生存そのものが、人間自身の手によって脅かされていることは異常な事態である。その大部分が「開発」の名の下に進行していることを見逃すことができない。たとえば、大口消費者に電力を供給するために河をせき止めダムを次から次へと建設する。火力発電所や石油コンビナートからは厖大な量の煙が吐き出されている。もっとも、その石油による製品や電力の恩恵を受けているのは一般国民であると説明されてい

る。また、大銀行や金融業者が融資した巨額の資金で、山地や森林が容赦なく切り拓かれ、自動車道路が通され、住宅地や諸施設のための土地が造成される。その結果、降雨の度に水害や土砂崩壊を惹き起こす。

さらに、原子力発電の危険と恐ろしさは幾多の犠牲を以て既に証明済みにも関わらず、今なお進められている。

また、他の局面でも自然破壊を加速させる深刻な事態が現出している。空き缶・空き瓶・種々の石油製品、そして自転車・自動車・建築廃材・産業廃棄物・原子力発電所から出る放射能汚染物質等々、果ては原子力潜水艦の廃棄など、その処理を考慮に入れない大量生産の結末が、今日の自然破壊をもたらす重大な原因の一つとなっていることは知られている通りである。

しかし、このように自然破壊の元凶が国民個々人の手の届かない巨大産業や大資本であるとしても、その中には産業や物資流通の発達によって、その恩恵の一部に与っている消費者たる一般国民が、その結果に対するいかほどかの責任を負わされる部分のあることを知らなければならない。その一つに、自己の責任にかかわるものを捨てることに対する道義である。おおよそ、使用済みのものを自己への何等の呵責もなく、他者への何等の羞恥心もなく、屋外なら道路といわず原野といわず廃棄してはばからない感性を、人々に定着させたのは喫煙習慣であったと考えている。道路や原野、河川や池や湖などへの空き缶や空き瓶の全く無造作な廃棄は、たばこの廃棄感覚以外のなにものでもないと言わなければならない。このような習俗は伝承されるべきではないだろう。なぜなら、自然の保護、延いては人間保護を口にする資格を失うからである。

経済と心の問題点

経済第一主義という言葉が最近、否定的な意味でしばしば聞かれるようになった。経済的には豊かになったが、心が貧しくなったというようにである。この認識は果たして正しいのであろうか。

経済的豊かさ貧しさといった問題は、単に異なった経済圏との比較の問題ばかりではなく、一つの経済圏の内部で、如何に富が分配されているかの問題でもあろう。貧しいとされている国や民族の中にも豊かな生活を享受している一部の人たちがいることであろうし、豊かとされている国にも貧困にあえぐ多くの人々のいることはわが国に当てはめて見渡しても明らかである。豊かな生活をしている者が、この国は豊かであるということは全く当を得ていない。

また心の問題が語られる際に決まって引き合いに出されるのは「物資的に貧しかったころの人々の心は、相互扶助の思いやりがあって、もっと豊かであった」というのがある。これによれば心が貧しくなったのは、あたかも個々人の責任ででもあるかのようであるが、この設定は誤っていると言わなければならない。

特に第二次世界大戦直後の一時期を除いて、わが国の経済は、少なくもと表面的にはめまぐるしく展開したが、その過程であらゆる分野で働く人々には、以前にもまして均質化が求められるようになったことは看過できない。特に企業にとっては個性や地域性は必要でないばかりか、むしろ邪魔なこととなった。地域意識の崩壊、家族関係の崩壊は、地域性や家族関係を全く無視してきた結果といって良いだろう。単身赴任などはその典型例であろう。このような社会状況をそのままにして、心の豊かさを説いても空しいと言わなければならない。

このような状況の中で、自己を見つめる個性豊かな人格の形成、伸び伸びと豊かな感性を備えた人格の形成を目指す教育者や宗教家は、いよいよ声を大にして人間性の再発見と再高揚、すわなちヒューマニズムの再生を社会に向かって宣揚すべきと考えるものである。